

沖縄文化協会 2024年度 東京公開研究発表会

日 時：2024年10月5日(土) 9:00~17:05 (予定)

場 所：明治大学 駿河台キャンパス グローバルフロント 3階 4031 教室 (千代田区神田駿河台1丁目1)

参加費：会員は無料、非会員の方は500円

全体スケジュール

総合司会〈松永 明〉

9:00~9:05 開会の辞 波照間 永子 (沖縄文化協会 2024年度 東京公開研究発表会 実行委員長)

9:05~11:55 研究発表 午前の部

11:55~13:00 - 昼食休憩 -

* 発表会場での飲食は原則禁止されていますので、周辺の飲食店をご利用いただくか、定められた昼食会場をご利用ください。

13:00~15:50 研究発表 午後の部

15:50~16:00 - 休憩 -

16:00~17:00 伊波普猷没後77周年・おもろ研究会77周年記念特別講演「沖縄文化協会の歩みと展望」(仮)
波照間 永吉 (沖縄文化協会顧問/前会長・沖縄県立芸術大学名誉教授・名城大学大学院特任教授)

17:00~17:05 閉会の辞 仲原 穰 (沖縄文化協会会長)

18:00~ 懇親会 会費4,500円(予定)

* 懇親会につきましては会場の都合があり大学内では開催しません。近隣の会場を予約しておりますので、参加を希望される方は以下のフォーム (QRコード) から9月28日 (土) までに予めお申し出ください。フォームにご記入いただいた連絡先に、懇親会担当 (後藤育慧) から返信いたします。

https://docs.google.com/forms/d/e/1FAIpQLScWOoGcEPH753qvOG9I4sRjdc4_LfgZoa0EKfsHGe_W6RKsIQ/viewform?usp=sf_link



- ①09:05～09:35 西岡 敏 (沖縄国際大学)
沖縄古語における活用語の再構形と今後の展開
- ②09:40～10:10 割子田 あんな (琉球大学大学院地域共創研究科)
目取真俊「ブラジルおじいの酒」論
—ブラジル移民と戦争をめぐる沖縄の文化的記憶—
- ③10:15～10:45 久貝 典子 (沖縄県立芸術大学芸術文化研究所共同研究員)
『鎌倉芳太郎資料集』にみる御用布に関する語彙について
- ④10:50～11:20 大竹 有子 (沖縄県立芸術大学芸術文化研究所共同研究員)
“現代の琉装”を中心とした衣生活における沖縄の表象
- ⑤11:25～11:55 三村 宜敬 (公益財団法人南方熊楠記念館)
本山桂川の与那国島調査
—100年前の写真と現代のリンク—

【午後の部】

- ⑥13:00～13:30 泉水 英計 (神奈川大学)
与那国島にみる戦後沖縄の僻地医療
- ⑦13:35～14:05 古里 友香 (神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科博士後期課程)
本土復帰後の横浜鶴見の沖縄芸能
—「琉線会」の活動を事例に—
- ⑧14:10～14:40 小橋川 ひとみ (名桜大学非常勤講師)
花城 洋子 (前沖縄県立芸術大学教授・比較舞踊学会会員)
琉球舞踊における創作舞踊の実態
—舞踊公演パンフレット(1965-2014)より—
- ⑨14:45～15:15 山本 佳穂 (東京藝術大学大学院音楽研究科博士後期課程)
女性が歌三線を学ぶ「場」をめぐる諸問題
—沖縄県立芸術大学、コンクール、国立劇場おきなわ、研究所の比較から—
- ⑩15:20～15:50 金城 厚 (沖縄県立芸術大学芸術文化研究所)
18世紀琉球の三線音楽作曲法「節変わり」と原曲の行方

【伊波普猷没後 77 周年・おもしろ研究会 77 周年記念特別講演】

- 16:00～17:00 波照間 永吉 (沖縄文化協会顧問／前会長・沖縄県立芸術大学名誉教授・名桜大学大学院特任教授)
沖縄文化協会の歩みと展望 (仮)

沖縄古語における活用語の再構形と今後の展開

西岡 敏（沖縄国際大学）

『沖縄古語大辞典』（1995 年刊、角川書店、以下『沖古』）の「あとがき」で、外間守善は本辞典の「見出し」について次のように述べている。

結局、「見出し」は、試行錯誤の末、当初、われわれの誰も考えていなかった再構形を採用せざるを得なかった。終わってみれば、十数年前、「琉球語源辞典の構想」を打ち出された服部四郎先生の慧眼に驚くのみである。[一中略一] 三母音化、口蓋化の激しい沖縄中南部の方言では再構が困難なものは、宮古、八重山、奄美など、沖縄とは別の変化現象をもつ諸方言が参考になった。本書の「見出し」は、これから研究されるであろうこれらの方言をも包括するものである。（あとがき—『沖縄古語大辞典』が生まれるまで—）

「見出し」語が、名詞などの不変化詞であれば、現在の琉球諸方言・日本諸方言および文献にある同語源と思われる語彙同士を比較して、再構形を設定できよう。しかし、動詞や形容詞といった用言は、諸方言や文献に様々な活用形をもって現れ、それら形がどのように生み出されるかについては検討箇所が多く残されている。

活用語の再構形については、『沖古』の「凡例」の〈語形欄〉に、「活用語は、活用形ごとに分類し、想定される語源の形を太字で示して、付属語の付いた形の読みと口語訳を付し、異表記を掲出した。」(p. 6) と書かれている。「想定される語源の形」が「再構形」のことで、例えば、その例として挙げられている見出し語「みえる【見える】」では、「(普・連用) **みえ**をり〈見えている〉みゆい・みより・めより」と提示されている。ここでは、方言語形「みゆい・みより・めより」の「再構形」が「みえをり」という「普通態・連用形」である、という分析が示されている。

こうした分析が『沖古』では活用語に施されているが、琉球語研究の進展により、誤りと思われる「再構形」も幾つか見られる。本発表では、共時言語学および通時言語学の方法に基づき、『沖古』の活用語の〈語形欄〉について修正意見を提示する。例えば、終止形の活用語尾の再構形「ん」は、沖縄語の疑問形や沖永良部方言の事例により、m音を含む「む」または「も」に修正すべきである。また、「～しよう」を意味する「志向形」も、再構形は「いか〈行こう〉」ではなく、語尾が「いかー」と延びる方言の事例により、意志の助動詞「む」を添えた「いか-む〈行こう〉」と再構しなければならない。

近刊の『組踊下』（琉球文学大系 15、2024 年刊、ゆまに書房）の解説で、発表者は、分析方法を構造主義言語学の形態論の分類と関連付けつつ、動詞の新たな活用表を提示し、「再構形」についても再考した。『沖古』では地域的に「沖縄古語」に制約されているが、それを広げて「北琉球語」の「再構形」、「南琉球語」の「再構形」、そして、それらを統合した「琉球語」全体の「再構形」について道筋を付ける必要がある。

目取真俊「ブラジルおじいの酒」論

—ブラジル移民と戦争をめぐる沖縄の文化的記憶—

割子田 あんな（琉球大学大学院地域共創研究科）

本研究発表では、目取真俊（1998）「ブラジルおじいの酒」を分析しながら、作品内で沖縄戦の文化的記憶の変容と伝達に対して移民帰りの人物が果たす役割について論じる。

研究テーマの背景として、ブラジルにおける沖縄移民の文化維持の努力と、沖縄戦が沖縄の文化的記憶を再構築する影響への考慮が重要である。沖縄から移民を海外へ送り出す傾向の中、ブラジルにも1908年から1937年までの戦前時期に多くの移民が移住した。その移民は、経済的な困難だけでなく、他の日本人移民による沖縄文化への偏見など、社会文化的な混乱にも直面しながら、移民先の各地域でコミュニティを形成し、お役所的なことや経済的なことでの相互援助だけでなく、沖縄の文化を自由に実践し、伝えるために集まった。これらの努力は、沖縄の文化的記憶の保存の一形態と見なすことができる。つまり、集団が自らの歴史、自己イメージ、アイデンティティについて保持する集合的記憶であり、それが個々のメンバーをつなげる役割を果たしていたと言える。その結果、文化的記憶で繋がり強い地域コミュニティを形成するだけでなく、沖縄及び他国の移民コミュニティとの関係維持に努めることが沖縄からの移民の特徴となった。

しかし、沖縄では1945年の沖縄戦が文化的記憶に悲劇的な変化をもたらし、集団的トラウマとして記憶を再構築させた。一方、ブラジルでは独裁政権下で日独伊三国同盟の言語での出版が制限され、戦争に関する情報は乏しく、しばしば歪められていた。これにより、日系コミュニティ内で日本の勝利または敗北に関する「勝ち負け抗争」が生じ、沖縄移民は沿岸部の町であるサントスから家を追い出されるなどの事態が発生した。その結果、沖縄で戦争を経験した者と移民先で過ごした者との間で戦争をめぐる記憶の分裂が見られた。

そして目取真俊は「ブラジルおじいの酒」において、この断絶を移民帰りの人物と沖縄戦を経験しなかった新世代の少年との交流を通じて探求する。最初には、戦争を直接体験していない「ブラジルおじい」が帰省後、地域社会から他者として扱われる様子が描かれている。しかし、戦争の影響が直接体験していない人々にも及ぶこと、例えば家族の喪失や旧家が軍事基地に変わるなどが示されている。目取真はこの作品を通じて、戦争の記憶がどのように形成され、伝達されるかを考察し、移民帰りの人物の記憶の断絶をもたらすのではなく、むしろその複雑化に寄与することを示している。

こうして目取真の「ブラジルおじいの酒」は、出身地である沖縄とブラジルという移民先での記憶の分裂を超え、移民帰りの人物も戦争をめぐる沖縄の文化的記憶の多元的な把握と新たな伝達の方法に役立っていると示したのである。

『鎌倉芳太郎資料集』にみる御用布に関する語彙について

久貝 典子（沖縄県立芸術大学芸術文化研究所共同研究員）

本発表では、『鎌倉芳太郎資料集』（以下『資料集』と省略）から抽出した染織に関する語彙のうち、御用布に関する語彙を蓄積した部分について解釈を行い、発表する。

先行研究：美術工芸及び芸術文化の分野では、御用布に関する分野の先行研究は少ないが、最新の研究では、宮城奈々の「近世琉球における御用布注文の仕組みに関する考察 — 「道光 15 末年御手形写」・「道光 18 戊年御手形写」を中心として—」がまとまった論考である。宮城は自身の「御絵図帳」研究を発展させ、先行する田中俊夫、柳悦州ら美術工芸分野の論考、砂川玄正、平良勝保、得能壽美とティネッロ・マルコらの歴史分野の論考を分析、道光 15 年、道光 18 年の御用布注文の仕組みを考察し、注文者・部署・御用布の使途、江戸立に供えて御用布注文が増えるなど新知見を加えた。

研究の背景：近世琉球より現在に続く沖縄の芸術文化を研究する上で、「鎌倉芳太郎ノート」を編集し、刊行した『資料集』は、収録された琉球関係史料の豊富さなどから、優れたテキストである。しかし、同ノートは研究者の視点で資料を記録したものであり、各史料を抄写したものの集合体である。また、同じ史料が幾つかのノートに複数回記されている。従って、あるテーマに沿って『資料集』を読み進めるには若干の手間暇を要する。しかし本研究では、その『資料集』を「染織語彙」をキーワードに横断的に読み込み、結果として近世琉球の染織物の諸相について様々な知識が得られた。その方法を公表し、アプローチの一例として提示する。

方法：「御用」に関する用語は 601～623 項の 22 項ある。それらの解釈方法の一例をあげると次の通りである。並びは項番号・よみ(ひらがな)・『資料集』の表記・①(解釈)・②用例・③『資料集』に記された原典名・④『資料集』記載のノート及び頁番号となる。

607 ごようはおり 【御用羽織】①尚灝 19(1822)年、年頭慶賀使として薩摩へ渡った向氏識名親雲上朝英が、江戸より帰郷した大御隠居様（島津重豪）から賜与された羽織。羽織は島津重豪が江戸へ行くときに着用していたものとのことだが、どのようなものかは不明。「本年為賀准大御隠居様回国湯治 賞賜物件及自江府発駕之時賜御用羽織事遣向氏識名親雲上朝英七月二十四日到薩州翌年二月初七日帰国」。③『中山世譜 卷五』 ④45-177 [日]

付記すると、『資料集』より選択した語彙の背景、つまり原文にどのように使用されていたかという点に留意し、解釈を試みた。「」文がその原文であるが、①の解釈に必要と考えられる場合に載せた。[] はその資料が記録された場面について考察し、理解できる範囲で記した。

結論：近世琉球の貢布の中でも価値の高い特別品である御用布の徴収については、首里王府も付加価値を十分認識していたため、製糸・染め・製織まで厳正な年間計画をたて、人の手配、物品の管理、絵図による注文品に対する検査など、一貫してシステムティックに行われていた。近世の御用布徴収体制が、近代以降の沖縄の織物産業の維持発展へ与えた影響は大きなものであったといえる。

“現代の琉装”を中心とした衣生活における沖縄の表象

大竹 有子（沖縄県立芸術大学芸術文化研究所共同研究員）

“現代の琉装”とは、近代以前の沖縄の衣生活を現代に活かそうとする衣装、およびその動きを指す。現在では、琉装は日常着としての地位をほぼ失っているが、2000年代に入って、現代の生活に適したアレンジを加えた上でふたたび日常着として見直そうという動きがみられる。発表者はこの動きに注目し、2021年度の沖縄県立芸大芸術文化研究所紀要に研究ノートとしてまとめ、2024年度の民族芸術学会第40回大会において発表した。これらの時点では、近代から現代に至る琉装の状況および“現代の琉装”の概観を調査・分析したまとめにとどまっている。

本発表では“現代の琉装”が成立した背景や置かれた位置を、琉装以外の衣生活（和装・洋装）や工芸、琉装のイメージに影響する事象としての観光とも関連させながら考察したい。なお、衣生活に関する感覚は十人十色であり、数値やデータとして整理しにくいのが、それを踏まえた上で分析を試みている。

発表者はこれまで“現代の琉装”に関わる人々（考案、縫製、PR）、舞踊家、染織関係者などへのインタビューを通じて、現代の多くの沖縄の人々の中には、琉装を“我々を象徴する親近感ある衣装”とする感覚が希薄であることを理解した。“伝統的な正装”の地位を占めるのは、むしろ和装である。

現状では“現代の琉装”はまだまだ少数派で、着用するのは確固としたポリシーを持つ人、ありていに言えば変わり者である。制作者や愛好者には、慰霊の日の行事への参加や反基地の意思表示といった活動を積極的に行う人も多く、20世紀初頭のインド独立におけるスワデーシー運動のように政治的見解・信条を表現するツールともなっている。

近代以前の沖縄の衣生活は琉装であり、その意味では沖縄の“民族衣装”は琉装であると言えようが、現在ではそう思っている人は多くはない。「琉装」の一般的イメージは多く芸能・通過儀礼の衣装または観光用であり、日常の衣生活における琉装をイメージできる人は少ない。これは、庶民の日常的衣生活に関するまとまった研究成果がなく、アウトリーチがあまりなされてこなかった状況にも理由が求められよう。民藝運動以来、注目され続け、先行研究の積み重ねもある染織技術や作品とは対照的である。

古謡にみられる衣装への愛着や信仰と比べて、沖縄の人々は衣生活において、アイデンティティや独自性や“沖縄古来のもの”を表現することをやめたのだろうか。

“現代の琉装”と並行して和装や洋装の諸相を俯瞰すると、そうは思われない。和装のリバイバルとも異なる動きで、沖縄の人々も“我々を象徴する衣装”を模索し続けている。それが“現代の琉装”であり、「かりゆしウェア」であり、沖縄発の洋服ブランドであり、（批判や揶揄は多いが）行事や観光の場でアレンジされた琉装であり、何よりもこれらの併存であると発表者は考えている。当日は事例を交えて、こうした衣生活の諸相を紹介・考察する。

本山桂川の与那国島調査

—100 年前の写真と現代のリンク—

三村 宜敬（公益財団法人南方熊楠記念館）

本山桂川は 1924（大正 13）年の 1 月に与那国島へ渡航した。この渡航に関する経緯やルート、そして撮影した写真（沖縄県立博物館・美術館蔵）に関しては 2019 年に「本山桂川と沖縄調査」と題して口頭発表をおこなった。また、以前の口頭発表でも主に沖縄本島で大正 12, 3 年に撮影された写真と桂川の私家本『琉球土俗叢書』について扱ったため、桂川が 1925（大正 14）年に爐邊叢書の一冊としてまとめた『与那国島図誌』（郷土研究社大正 14 年）について簡単に説明をしたのみであった。特に写真に関しては『与那国島町史』には数枚が掲載されているものの、撮影場所や被写体について検証されている様子はない。本発表では『与那国島図誌』を中心に桂川の与那国島での調査、撮影した写真について扱う。そして以下に述べる与那国島で実施した写真パネル展を通じ、桂川の写真と現代をリンクさせることが可能となった。

まず報告者は 2024（令和 6）年 1 月に、与那国島において本山桂川に関する写真パネル展「本山桂川の写した 100 年前の与那国島」（会期：令和 6 年 1 月 23 日～ 令和 6 年 2 月 11 日まで）を DiDi 与那国交流館（与那国島歴史文化交流資料館）で実施した。この展示には沖縄県立博物館・美術館に所蔵されている本山桂川写真集「琉球」から、与那国島に関するもの 20 点の他、沖縄本島などの写真をパネル展示した。この展示の主な目的は、桂川がちょうど 100 年前に与那国島で撮影した写真を普及することであった。その結果、町民の方々をはじめ旅行者など多くの方々に桂川の撮影した与那国島の写真を見ってもらうことで撮影場所や被写体について伺うことができた。これらの情報から桂川の行動範囲などを知ることができ、約 100 年前の写真と 2024 年をリンクさせることが可能となった。

『与那国島図誌』において桂川が主として調査・撮影を行ったのは、祖納地区である。これは桂川に島の案内や生活について吉元広栄の尽力があったためであろう。当時農業技手であった吉元は写真の被写体として家族共々協力をしていることが桂川の写真から知ることができる。また桂川は与那国島での調査をさも散々なものであったかのように記録しているが、食事面だけをとってみても、米や豚肉を食すことができていることから桂川の調査は歓迎されていたことが伺えるのである。

以上のように本発表では本山桂川が撮影した写真に関する与那国島での展示と現地調査の結果を報告する。

与那国島にみる戦後沖縄の僻地医療

泉水 英計（神奈川大学）

近年の観光客には『Dr. コトー』のロケ地として知られる与那国島は、この人気テレビドラマが取り上げた僻地医療という問題をじっさいに体現した離島である。本論では、この島で働いた医療人たちの足跡を辿ることによって観察の定点を置き、そこから戦後沖縄の僻地医療に特徴的な事象にあらためて光を当ててみたい。沖縄戦による人的および設備的損害や、米国施政権という事情によって生じた医療・公衆衛生制度についてはすでに多くの研究がある。また、個々の医療人の自伝的著作あるいはその活躍を記した評伝も少なくない。しかし、ある一定の地域社会のなかで、複数の医療人たちの活動が交差する様相は、管見では、描かれたことがなかった。しかし、戦後沖縄に特徴的な医療・公衆衛生の諸制度は、とりわけ僻地医療の場合には地域社会のなかにその具体的な運用をみるのであり、地域社会を単位とした観察が求められる。

与那国ではじめて安定的な開業をした医師は仲嵩嘉尚（1886-1963）であった。仲嵩は沖縄医師教習所で学び、帰島後は村会議員となり、戦前最後の村長も務めた地域の名士であった。ついで、台北医専で学んだ池間栄三（1905-1971）が帰島したが、召集を受けたため、開業医として安定するのは戦後であった。仲嵩も池間も島の中心である祖納集落で開業した。台北医専の最後の卒業生であった崎原永著（1922-1998）も敗戦で与那国に引き揚げたが、義兄弟となる池間への営業的配慮もあって、当時は閩貿易で人口が急増していた久部良集落に移って開業した。同時期の久部良には台北で免許を取得した助産婦の玉城喜美代（1906-2006）がやはり帰島していて、初の女性村会議員にも選出された。しかし、玉城は任期終了後に石垣に移転して助産院を開業し、崎原も、戦争のために不十分であった専門的訓練を求めて名護病院に転出したために久部良には医療人がいなくなった。この状況を救ったのが医介輔の仲本トミ（1920-1985）であった。仲本は沖縄県立病院で看護婦免許を取得し台湾の陸軍病院に勤めていたが、戦中に兄の葬儀のために帰島したまま与那国に留まり戦後は久部良で介輔診療所を開業した。戦後の保健所制度が確立すると、八重山保健所与那国出張所が設置され、池間が出張所長を兼任した。この出張所に駐在した公衆衛生看護婦が与那覇しず（1923-2010）であった。1971年に池間が急逝すると与那国に開業医がいなくなり、町営診療所が設置され島外出身の医師が交代で赴任した。杉山正は沖縄県職員として与那国に派遣されたが、1960年代末に日本政府援助の一環として八重山に派遣された医師であった。町営診療所に赴任する医師のリクルートは難しく、黄癸発という台湾籍の医師が勤めていた時期があった。

以上のような与那国で活動した医療人たちを通して、台湾での医師および看護婦の養成や、戦後沖縄の医師不足を補填した介輔制度、助産婦や保健婦という専門的職業資格、本土派遣医師、外国籍医師といった沖縄の僻地医療をめぐる問題を再検討したい。

本土復帰後の横浜鶴見の沖縄芸能

—「琉線会」の活動を事例に—

古里 友香（神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科博士後期課程）

本土復帰前の昭和46年、神奈川県横浜市鶴見区の沖縄県人集住地区にて「琉線会」が発足した。「琉線会」とは、横浜鶴見の沖縄芸能家たちによる琉球芸能文化研究を目的とした研究会である。約10年間で五回の公演活動を考察し、この時期の横浜鶴見の沖縄芸能の特徴を明らかにすることを目指した。

横浜鶴見の潮田地区周辺には大正期以降から現在まで、多くの沖縄県人が集住し、郷友会を通じて地縁で結ばれてきた。またこの地では、古典楽曲や民謡、箏曲、琉球舞踊などが根付き、現在まで継承されている。

それまでの関東における沖縄芸能の研究や公演は、沖縄から芸能家を招くことが多かった。昭和26年4月29日に早稲田大学大隈講堂にて開催された「沖縄諸島の歌と踊の會」では、渡嘉敷守良ら共に佐久川昌子、池宮喜輝らと共に仲宗根忠治といった、後に川崎沖縄芸能研究会を牽引する関東在住の芸能家も出演しているが、例えば昭和3年4月の日本青年館での「郷土舞踊と民謡の会」や、昭和11年の日本民俗協会が主催した「琉球古典芸能大会」、昭和30年11月に行われた沖縄文化協会主催の「琉球の舞踊」など、何れの公演も、実演家ではない研究者や文化人、在京団体によって主催され、沖縄から芸能家を招聘する形で披露されてきた。

一方横浜鶴見では、戦後まもなく芝居小屋が建てられ、沖縄芝居や組踊が連日行われ、ごく狭い地域において、人々が互いに協力し合いこの地で沖縄芸能を盛り上げてきた。昭和30年以降は、沖縄コミュニティ外の人々に向け、盛んに芸能公演を行ってきたことはあまり知られていない。とくに「琉線会」発足後は沖縄芸能の黎明期であり、娯楽としての公演だけでなく、研究の成果発表として実演していたことを理解している人は少ないだろう。

本研究は、当時の公演出演者への調査、公演パンフレットや「琉線会」会長の平光雄が残した10冊以上のファイルにある手記より分析した。

全五回の公演では、毎回異なる研究テーマを設定し、沖縄芸能の新しい試みや可能性を実践した。例えば、弦楽四重奏や声楽家との共演、宮内庁楽部の雅楽と琉球古典楽曲の合奏、天台宗声明と十七八節の同時演奏など、革新的な演目が実施された。これらの取り組みは、鶴見の芸能家たちの技能と高い志を証明するものであり、「沖縄芸能を世界の芸能へ」の理念を掲げて行われていたものである。

鶴見の芸能家たちは、日本社会の中に身を置き、早い段階で沖縄芸能の素晴らしさを認識し、「沖縄」「日本」「世界」の枠組みに捉われず、「沖縄芸能」を世界に広めようとしていた。伝統を継承するだけでなく、生きた芸能として未来に向けて発展させる共通の志を持っていたのだ。今後「琉線会」の活動を議論の俎上に上げ、「沖縄の芸能史」に位置付けるためには、さらなる議論を元に研究を深める必要がある。

参考文献

本田安次 1999『本田安次著作集 日本の伝統芸能』第十九巻 錦正社

矢野輝雄 1993『沖縄芸能史話』 榕樹社

横浜・鶴見沖縄県人会編 2016『横浜・鶴見沖縄県人会—鶴見沖縄県人百年の歩み—』 横浜・鶴見沖縄県人会

琉球舞踊における創作舞踊の実態

—舞踊公演パンフレット（1965—2014）より—

小橋川 ひとみ（名桜大学非常勤講師）・花城 洋子（前沖縄県立芸術大学教授・比較舞踊学会会員）

御冠船芸能から受け継がれている今日の琉球舞踊は、古典、雑踊、そして創作系の舞踊^{注1}（以後創作舞踊）が数多くみられる。芸道論は別にして、舞踊家にとって自身の作品を世に残すことはおそらく最大の目標のひとつであろう。創作舞踊について、花城（2007）の報告があり414作品名が抽出されている。しかし、創作舞踊の全体的把握には至っていないのが実状といえよう。昨今、琉球舞踊家の記念誌、顕彰記念公演等の出版が相次ぎ、記録資料が充実されつつある。中には、流派や実演家個人の詳細な活動記録が掲載されていることも多く、舞踊研究にとって貴重な資料である。上演される全ての公演資料の入手が望まれるが、それが不可能である点を断り、今回収集された公演パンフレット303（1965年～2014年）、近代期の新聞資料（1894年～1945年）などを基に琉球舞踊の創作舞踊の実態を報告する。

結論

- 1) 文献、舞踊関連資料、公演パンフレット等より得られた舞踊公演は3,000件余（1921年～2014年）である。そして、舞踊公演で演じられた創作舞踊699作品名（1931年～2014年）が得られた。
- 2) これら創作作品には、作舞、振付、振付舞踊、新作、創作、創作舞踊、等の明記があり、古典や雑踊と区別されている。一方、戦前の『琉球新報』（1898.10.21）には、仲毛芝居の「若衆踊、女踊、二才踊、女雑踊、越来踊」、1910年12月31日の沖縄座で「新踊り『鶴亀松』他踊りいろいろ」、1911年1月30日 踊り「三人尾類呼」 新踊り「再婚」一の記述から推察しても、新踊りが古典や雑踊と区別されていることから、新踊りは当時の創作系舞踊であることが伺える。
- 3) パンフレット等に明記された創作舞踊の伴奏は、既製（民謡）の音曲名と同名のもの、既製の音曲の組み合わせで構成されるものも多く見られる。1955年あたりからは、作詞・作曲を担う古典音楽家以外の登用が出てくる。そして積極的に伴奏音楽、洋楽との協奏等、音楽と舞踊の新たな境地に挑んでいる。玉城節子—花嵐 1965年、佐藤—鐘 1969年、の作品はその例といえよう。しかし依然として古典音楽はじめ既製音楽の使用は多くの創作作品に見られる。

このように今日の琉球舞踊の創作に対する捉え方や定義が実演家によって幅が広いことが分かった。また、伴奏音楽の構成の時代変遷ともいえる一面が捉えられ、創作舞踊に対する表現性の模索や進展が伺える。今回、音楽との関連性について分析や考察を行ってないため今後の課題のひとつであると考えている。

注1：創作系の舞踊：伝統的な琉球舞踊「古典」、「雑踊」以外の作品のこと

引用・参考文献

花城洋子、「琉球舞踊定期公演における上演作品に関する考察—沖縄県かりゆし芸能公演（1993～2001）の資料より—」、名桜大学総合研究所 紀要第11号、2007。

『琉球新報』（1894年12月16日～1940年12月18日）

『沖縄毎日新聞』（1909年2月28日～1914年12月31日）

女性が歌三線を学ぶ「場」をめぐる諸問題

—沖縄県立芸術大学、コンクール、国立劇場おきなわ、研究所の比較から—

山本 佳穂（東京藝術大学大学院音楽研究科博士後期課程）

本発表は、歌三線演奏を体系的に学ぶことのできる沖縄県立芸術大学、成果披露とフィードバックの場であるコンクール、専門家養成に特化した教育の場を備える国立劇場おきなわ、いわゆる「お稽古場」である研究所の実態を、女性歌三線奏者の立場から明らかにするものである。

歌三線は琉球王国時代に士族男性によって演奏されていた音楽で、現在「琉球古典音楽」と呼ばれる合奏の中心を担っている。現在は女性の歌三線人口が増加傾向にあるが、公演における演奏曲目や出演できる公演に暗黙の制限があり、演奏を耳にする機会は少ない（山本 2022）。

発表者はこれまでに、①コンクールにおける女性合格者は 1990 年頃から増加し始め、現在では男性合格者を凌ぐ勢いであること、②沖縄県芸大音楽学部琉球芸能専攻の在籍者数は女子が優勢であり、実技の成績も優れている傾向にあること、③それにもかかわらず、女性は大学内やコンクール合格者の公演「芸能祭」など限られた舞台を除き演奏活動の機会が得られにくいことを明らかにした（山本 2022）。しかし、琉球古典芸能の後継者養成の重要な拠点である国立劇場おきなわ、琉球古典芸能に携わる人々が幅広く集う研究所については検証を行っていない。

そこで本発表では、歌三線演奏を学ぶこれらの「場」の特性を通して、女性が歌三線という伝統にどのように位置付けられているかを考察する。

「琉球芸能専攻のあゆみ：国立劇場おきなわ琉球舞踊主催公演出演者からみる本専攻の役割」（2023）からは、沖縄県芸大卒業生の芸能活動を垣間見ることができる。また、国立劇場おきなわが琉球古典芸能の保存継承に果たす役割を、岡本彩・立石訓人「伝統芸能の継承と発展のための国立劇場の役割：国立劇場おきなわを事例として」（2023）を通して確認する。同時に、沖縄県立芸大琉球芸能専攻定期公演と国立劇場おきなわでの公演を、プログラム構成の観点から比較することで、女性歌三線奏者が置かれている状況を明らかにする。コンクールについては、久万田晋「戦後沖縄、二つの芸能コンクール」（2015）を通して琉球古典芸能における位置付けを確認するとともに、女性奏者の存在に及ぼした影響を考察する足掛かりとする。また、研究所における女性奏者の現状を調査するにあたり、各演奏団体が発行している記念誌を使用し、女性の所属人数や免許取得状況を調査する。

公教育の場である沖縄県芸大や、男女の別を度外視し演奏の質を問うコンクールと、行政が深く関わり伝統のあり方に直結する国立劇場おきなわでは、女性奏者の位置付けは大きく異なると予想される。また、研究所は各師匠のスタンスが大きく影響していると思われ、研究所の様相から女性奏者に対する認識の変化を概観できるだろう。

なお、本発表は 2024 年度笹川科学研究助成による女性を受けた研究課題「女性歌三線奏者と周辺の人々の関係性が及ぼす女性による歌三線演奏への影響」の経過報告の一部である。

18 世紀琉球の三線音楽作曲法「節変わり」と原曲の行方

金城 厚（沖縄県立芸術大学芸術文化研究所）

歌三線音楽には「古典音楽」とされる曲だけでも 200 曲あまり、民謡も含めると無数の楽曲が伝わっているが、これらの旋律の相互関係や成立・作曲の経緯についての音楽学的研究は始まったばかりで、マット・ギラン (2008)、および拙著 (2004) が僅かな試みである。もっとも、これらは旋律・楽式構造面からの研究であるが、歴史的関係にはあまり触れていない。

発表者は、18 世紀の琉球において「節変わり」という語が使われていた史実を明らかにした (金城、2021)。すなわち、18 世紀なかばの史料『大島筆記』に「節ガハリ」という語句があり、『屋嘉比朝寄工工四・付箋』にも「みフシかあい」という語句がある。このうち、「付箋」によれば、新里親方が「はへるなかふし」を「みふしかあい」と呼んでいたという。これにより、「はへるふし」を長く伸ばして「節変わり」にした旋律が「はへるなかふし」であると理解できる。しかし、元の旋律の「はへるふし」があったのか、現在にも伝わっているのか否かについては、当時は詳しく検討するに至らなかった。

そこで、今回、「屋嘉比朝寄工工四」の楽譜から、蝶節関連曲などを比較して検討した。分析方法は、発表者が開発したところの 4 拍ごとに区切って楽曲構造を明らかにする方法と、歌詞音列法 (歌詞を発する音のみを抽出した音列を比較する方法) の 2 つを併用した。

楽曲構造の比較では、「屋嘉比」の《蝶節》の三線旋律は現行の《昔蝶節》とほぼ同じであるので、この《蝶節》が新里親方の言う「はへるなかふし」にあたる、と言えよう。歌詞音列法では、《小蝶節》《綾蝶節》《蝶節》は相互に類似度が低く、別曲と思われるので、「節変わり」する前の「原・蝶節」にあたる曲は、屋嘉比以後に伝わっていない、と考えられる。

例えば「屋嘉比」では《御前風節》と《昔御前風節》という節名が掲載され、「節がわり」によって作られたとみられる曲が併存している。これらに対して《蝶節》は、「屋嘉比」の時点で既に全く別曲の《小蝶節》2 曲と《綾蝶節》が定着し、《蝶節》の元のフシ「原・蝶節」は歌われなくなったと考えられる。附言すれば、《早謝武名節》《謝武名節》《長謝武名節》も、現行の《チャンナ節》は原曲ではないと考えられ、《原・謝武名節》は行方不明である。

したがって、「節がわり」の曲の多くは、原曲の演奏伝承が廃れ、変奏曲のみが後世に伝わっていると考えられる。

- ・ 金城厚「沖縄音楽の構造——歌詞のリズムと楽式の理論」第一書房、2004
- ・ 同 「近世琉球における音楽用語『節がわり』について」『伝統と創造』10、2021
- ・ マット・ギラン「琉球音楽の旋律における『拡大』と『縮小』——『作田型の歌曲』を中心に——」『音楽学』55、2008

沖縄文化協会の歩みと展望（仮）

波照間 永吉（沖縄文化協会顧問／前会長・沖縄県立芸術大学名誉教授・名城大学大学院特任教授）

沖縄文化協会は、沖縄戦により甚大な被害を受けた郷里沖縄の救済と復興を願い、1946（昭和21）年に東京で設立された沖縄人連盟の中にその萌芽があった。1947（昭和22）年の伊波普猷の急逝後、時をおかずして、沖縄人連盟内の部局として「沖縄文化協会」が結成され、翌48年まで文化協会主催で講演会が行われた。

同じころ仲原善忠、島袋源七、島袋盛敏、金城朝永、宮良当壮、比嘉春潮らを会員として、戦中から行われていたおもろ研究会が再度開催されるようになって、それまでの「沖縄文化協会」とおもろ研究会との合同の機運が生じ、連盟を離れた独自の組織に改組され、伊波普猷の学灯を継ぐ志ある比嘉春潮、仲原善忠、宮良当壮、島袋源七、金城朝永の五名が運営委員となって、純粋な学術団体としての「沖縄文化協会」が誕生し、1948年に協会の機関誌『沖縄文化』第1号が刊行され、1949（昭和24）年4月には初代会長に仲原善忠が選出された。

のち沖縄文化協会は財政難を主因に1953（昭和28）年には機関誌の休刊を余儀なくされたが、おもろ研究会を初めとする学術活動は仲原善忠を中心に継続され、1961（昭和36）年には『沖縄文化』復刊1号が発行され、2024（令和6）年8月の第126号まで、沖縄地域に関する人文科学、社会科学全ての研究領域を包摂した、学際的な学術雑誌として『沖縄文化』の刊行が続けられている。

参考文献

波照間永吉（2014）「復刻版『沖縄文化』解説 第二期『沖縄文化』（第一号～第六八号）の歩み」、『復刻版沖縄文化』、不二出版。

(参考資料)

沖縄文化協会について

仲原 穰 (沖縄文化協会会長)

2024年8月31日

① 目的及び沿革

沖縄文化協会は、沖縄の文化を研究紹介しその発展に寄与することを目的とし、広く沖縄研究者および沖縄に関心を持つ人々を会員として運営されている学会である。主な事業としては、研究発表会や講演会の開催、機関誌『沖縄文化』の刊行、沖縄文化協会賞及び外間守善賞の表彰、沖縄文化資料の蒐集、複製、刊行などがある。歴史・経済・政治・民俗・宗教・言語・文学・音楽・芸能など、沖縄地域に関する人文科学、社会科学全ての研究領域を包摂し、専門領域を横断した学際的な研究活動が行われている点に特徴がある。

本会の創設は1948(昭和23)年9月である。仲原善忠を中心に1947(昭和22)年秋から比嘉春潮、島袋源七、島袋盛敏、金城朝永、宮良当壮ら沖縄研究者により開催されていた「おもろ研究会」と、終戦後沖縄県出身者の援護活動を行っていた沖縄人連盟の内に設置されていた部局「沖縄文化協会」が合同し、沖縄人連盟から独立して、学術団体としての「沖縄文化協会」は発足した。前年8月に急逝した沖縄学の父、伊波普猷の学灯を守ろうという志を抱いた、比嘉春潮・仲原善忠・宮良当壮・島袋源七・金城朝永、5名の沖縄研究者が運営委員となり、事務局は杉並区の比嘉春潮方に設置され、1949(昭和24)年4月には初代会長に仲原善忠が選出された。

創設以来、本会は月例の「おもろ研究会」を開催し、機関誌『沖縄文化』を発行して沖縄研究と研究者相互の交流を行っていたが、機関誌は財政難を主因に1948(昭和28)年2月の第27号を最後に休刊を余儀なくされた。しかし沖縄研究の活動自体は「おもろ研究会」を中心に持続され、8年後の1961(昭和36)年、機関誌『沖縄文化』は復刊され、2024年現在に至るまで継続して刊行され、沖縄研究の学灯を継承している。

初代会長仲原善忠は1964(昭和39)年11月に急逝したため、同月2代目会長に見里朝慶が就任し、1977(昭和52)年11月には外間守善が3代目会長に、2006(平成18)年11月には波照間永吉が4代目会長に、2022(令和4)年11月には仲原穰が現在の5代目会長に就任した。

2024年現在の、学会としての主要な活動は以下の通りである。

1. 毎年6月に沖縄で公開研究発表会を開催(1994年～現在)。
2. 毎年9月に東京で公開研究発表会を開催(2016年～現在(コロナ禍により2020～2022年は中止))。
3. 機関誌『沖縄文化』(学術刊行物)の年2回の発行(2024年現在126号)。
4. 若手研究者の研究奨励を目的として1979(昭和54)年より沖縄文化協会賞【研究業績対象】(比嘉春潮賞、仲原善忠賞、金城朝永賞、特別賞)、2021(令和3)年より沖縄文化協会外間守善賞【出版物対象】(正賞、特別賞)の表彰(2023年現在、前者総計136名、後者3名)。
5. 毎月第三土曜日に月例研究会を開催(東京。2024年3月～駒場東邦中学校・高等学校が会場。

2024年7月現在でおもろ研究会は通算794回、琉歌研究会は通算210回)。

② 学術機関誌『沖繩文化』

1948（昭和23）年11月、『沖繩文化』第1号を東京で発刊、毎月1日発行とする。

1949（昭和24）年06月、第8号発刊、誌名を『文化沖繩』に改める。

1950（昭和25）年02月、発行を隔月刊に改める。

1953（昭和28）年02月、通巻27号で経済難を主因に『文化沖繩』休刊。

1961（昭和36）年04月、誌名を『沖繩文化』に戻し、復刊第1号発刊（隔月刊年6回発行）

1963（昭和38）年10月、第13号より発行を年4回とする。

1971（昭和46）年01月、第33・34合併号より郵政省から学術刊行物の認可を受ける。

1971（昭和46）年07月、第40号より発行を年2回とする。

1989（平成01）年10月、第60号より編集・発行を沖繩に移転する。

2024（令和06）年08月現在、第126号発行。

◆発表会場

明治大学 駿河台キャンパス グローバルフロント 3階 4031 教室

(〒101-8301 東京都千代田区神田駿河台 1-1)

(注意)御茶ノ水駅に近い校舎です。最上階に「明治大学」と記されたシンボルタワー（リパティタワー）ではありません。



会場：明治大学 グローバルフロント

◆アクセス（最寄り駅から）

■JR 中央線・総武線／御茶ノ水駅（駅番号：JC03・JB18）下車徒歩約 3 分

■東京メトロ丸ノ内線／御茶ノ水駅（駅番号：M20）下車徒歩約 3 分

■東京メトロ千代田線／新御茶ノ水駅（駅番号：C12）下車徒歩約 5 分

■都営地下鉄三田線・新宿線、東京メトロ半蔵門線／神保町駅（駅番号：I10・S06・Z07）下車徒歩約 10 分

※お車でのご来校はご遠慮ください。お車で来校される場合は、近隣の有料駐車場をご利用下さい。

◆入会案内

△ 沖縄文化協会は、沖縄の文化を研究紹介し、その進展に寄与することを目的とし、広く沖縄研究者および沖縄に関心を持つ人々を会員として運営されている会です。

△ 本会は、上の目的にそって、研究発表会、公開講演会、機関誌『沖縄文化』の刊行、沖縄文化資料の蒐集、複製、刊行などの事業を行っております。

△ 所定の会費を納めれば、どなたでも会員になれます。年間会費 5,000 円（誌代 2 冊分を含みます）

△ 会費は振替もしくは現金で、下記の所へお送りください。

〒903-0815 沖縄県那覇市首里金城町 3-6

沖縄県立芸術大学附属研究所

鈴木耕太研究室気付

『沖縄文化』編集所

電話：098 (882) 5043

振替口座：02030-5-25170

URL：http://okinawabunka.c.ooco.jp/